

# 名人伝

中島敦



趙ちやうの邯鄲かんたんの都に住む紀昌きしようという男が、天下第一の弓の名人になろうと志を立てた。己おのれの師たのと頼たのむべき人物を物色するに、当今弓矢をとつては、名手・飛衛ひえいに及ぶ者およがあるうとは思われぬ。百歩へだを隔りゆうようてて柳葉りゆうようを射るに百発百中するという達人だそうである。紀昌は遙々はるばる飛衛をたずねてその門に入った。

飛衛は新人の門人に、まず瞬またたきせざることを学べと命じた。紀昌は家に帰り、妻の機織はたおりだい台の下に潜もぐり込んで、そこに仰向あおもむけにひっくり返った。眼めとすれすれに機躡まねきが忙しく上下往来するのをじつと瞬みかずに見詰みめていようという工夫くふうである。理由りゆうを知らない妻は大いに驚おどろいた。第一み、妙な姿勢しやうしを妙な角度かくどから良人おととに覗のぞかれては困るといふ。厭いやがる妻を紀昌は叱しかりつけて、無理むりに機を織り続けさせた。来る日も来る日も彼はかれこの可笑おかしな恰好かつこうで、瞬またたきせざる修練しゆれんを重ねる。二年にの後のちには、遽あわただしく往返わんぱんす

る牽挺まねぎが睫毛まつげを掠かすめても、絶えて瞬まくことがなくなつた。彼はようやく機はたの下から匍はいだ出す。もはや、鋭利えいりな錐きりの先をもつて瞼まぶたを突つかれても、まばたきをせぬまでになつていた。不意ひに火の粉こが目こに飛入こらうとも、目の前に突然とつぜん灰神楽はいかぐらが立たとうとも、彼は決して目をパチつかせない。彼の瞼まぶたはもはやそれを閉じるべき筋肉の使用法を忘れ果て、夜、熟睡じゅくすいしている時でも、紀昌の目はカツと大きく見開ひらかれたままである。ついに、彼の目の睫毛まつげと睫毛まつげとの間に小さな一匹びきの蜘蛛くもが巣すをかけるに及んで、彼はようやく自信を得て、師の飛衛とべゑにこれを告げた。

それを聞いて飛衛とべゑがいう。瞬まかざるのみではまだ射しやを授けるに足りぬ。次には、視みることを学べ。視みることに熟して、さて、小を視ること大のごとく、微びを見ること著ちよのごとくなつたならば、来きたつて我に告げるがよいと。

紀昌は再び家に戻り、肌着の縫目から虱を一匹探し出して、これを己が髪の毛をもつて繫いだ。そうして、それを南向きの窓に懸け、終日睨み暮らすことにした。毎日毎日彼は窓にぶら下った虱を見詰める。初め、もちろんそれは一匹の虱に過ぎない。二三日たつても、依然として虱である。ところが、十日余り過ぎると、気のせいか、どうやらそれがほんの少しながら大きく見えて来たように思われる。三月目の終りには、明らかに蚕ほどの大きさに見えて来た。虱を吊るした窓の外の風物は、次第に移り変る。熙々として照っていた春の陽はいつか烈しい夏の光に変わり、澄んだ秋空を高く雁が渡って行ったかと思うと、はや、寒々とした灰色の空から雲が落ちかかる。紀昌は根気よく、毛髪の先にぶら下つた有吻類・催痒性の小節足動物を見続けた。その虱も何十匹となく取換えられて行く中に、早くも三

年の月日が流れた。ある日ふと気が付くと、窓の虱が馬のよう  
な大きさに見えていた。占めたと、紀昌は膝を打ち、表へ出る。  
彼は我が目を疑った。人は高塔であつた。馬は山であつた。豚  
は丘のごとく、雞は城楼と見える。雀躍して家にとつて返した  
紀昌は、再び窓際の虱に立向い、燕角の弧に朔蓬の籥をつがえ  
てこれを射れば、矢は見事に虱の心の臓を貫いて、しかも虱を  
繋いだ毛さえ断れぬ。

紀昌は早速師の許に赴いてこれを報ずる。飛衛は高踏して胸  
を打ち、初めて「出かしたぞ」と褒めた。そうして、直ちに射  
術の奥儀秘伝を刺すところなく紀昌に授け始めた。

目の基礎訓練に五年もかけた甲斐があつて紀昌の腕前の上達  
は、驚くほど速い。

奥儀伝授が始まつてから十日の後、試みに紀昌が百歩を隔て

て柳葉を射るに、既に百発百中である。二十日の後、いつぱいに水を湛えた盃を右腕の上に載せて剛弓を引くに、狙いに狂いの無いのはもとより、杯中の水も微動だにしない。一月の後、百本の矢をもって速射を試みたところ、第一矢が的に中れば、続いて飛来つた第二矢は誤たず第一矢の括に中つて突き刺さり、更に間髪を入れず第三矢の鏃が第二矢の括にガツシと喰い込む。矢矢相属し、発発相及んで、後矢の鏃は必ず前矢の括に喰入るが故に、絶えて地に墜ちることがない。瞬く中に、百本の矢は一本のごとくに相連なり、的から一直線に続いたその最後の括はなお弦を銜むがごとくに見える。傍で見ていた師の飛衛も思わず「善し！」と言つた。

二月の後、たまたま家に帰つて妻といさかひをした紀昌がこれを威そうとて烏号の弓に綦衛の矢をつがえきりりと引絞つて

妻の目を射た。矢は妻の睫毛三本を射切つてかなたへ飛び去つたが、射られた本人は一向に気づかず、まばたきもしないで亭主ていしゅを罵り続けた。ののしけだし、彼の至芸による矢の速度と狙いの精妙さは、実にこの域にまで達していたのである。

もはや師から学び取るべき何も無くなつた紀昌は、ある日、ふと良からぬ考えを起した。

彼がその時独りつくづくと考えるには、今や弓をもつて己に敵すべき者は、師の飛衛をほかおいて外に無い。天下第一の名人となるためには、どうあつても飛衛を除かねばならぬと。秘ひそかにその機会を窺うかがつている中に、一日たまたま郊野こうやにおいて、向うからただ一人歩み来る飛衛に出遇であつた。とつさに意を決した紀昌が矢を取つて狙いをつければ、その気配を察して飛衛もまた

弓を執とつて相応あうずる。二人互たがいに射れば、矢はその度に中道に  
して相当り、共に地に墜おちた。地に落ちた矢が輕塵けいじんをも揚あげな  
かつたのは、兩人の技がいずれも神しんに入いつていたからである。さ  
して、飛衛の矢が尽つきた時、紀昌の方はなお一矢を余あしていた。  
得えたりと勢せい込んで紀昌がその矢を放はなてば、飛衛はとつきに、傍  
なる野茨のいばらの枝えだを折おり取り、その棘とげの先端せんたんをもつてハツシと鏃やぶを  
叩たたき落おした。ついに非望ひぼうの遂とげられないことを悟さとつた紀昌の心  
に、成功せいこうしたならば決して生なじなかつたに違ちがひない道義だうぎ的てき慚愧ざんき  
の念ねんが、この時忽こつえん焉んとして湧わきお起こつた。飛衛の方では、また、危  
機きを脱だつし得えた安堵あんどと己おのれが伎倆ぎりょうについての満足まんぞくとが、敵てきに對たいする  
憎にくしみをすつかり忘れさせた。二人は互たがいに駈かけ寄よると、野原の  
真中まんなかに相抱あいだいて、しばし美しい師弟愛しだいあいの涙なみだにかきくれた。(こ  
うした事を今日の道義觀だうぎくわんをもつて見るのは当あたらない。美食家めいしけの齊せい

の桓公かんこうが己おのれのいまだ味あじわつたことのない珍味ちんみを求めた時、厨宰ちゆうさいの易牙えきがは己おのれが息子むすこを蒸焼むしやきにしてこれをすすめた。十六歳さいの少年せうねん、秦しんの始皇帝しんわうていは父ちちが死しんだその晩ばんに、父ちちの愛妾あいしやうを三度さんど襲おそうた。すべてそのような時代じだいの話わたりごとである。

涙なみだにくれて相擁あいようしながらも、再びまた弟子でしがかかる企たくらみを抱かかりようなことがあつては甚はなはだ危あやいと思おもつた飛衛へいゑは、紀昌きしやうに新あらたな目標めくわうを与あたへてその氣いきを転まずるにしくはないと考かんがへた。彼かれはこの危あや険あやな弟子でしに向むかつて言いつた。もはや、伝つたうべきほどのことはことごとく伝つたへた。爾なんじがもしこれ以上いじやうこの道みちの蘊奥うんのうを極たぎめたいと望のぞむならば、ゆいて西さいの方大行かたたいこうの嶮けんに攀よじ、霍山かくざんの頂たかを極たぎめよ。そこには甘蠅かんよう老師らうしとて古こ今こんを曠むなしゆうする斯道しどうの大家たいかがおられるはず。老師らうしの技わざに比ひべれば、我々われらの射やのごときはほとんど兎戲じぎに類たがひする。爾なんじの師しと頼たのむべきは、今は甘蠅かんよう師しの外ほかにあるまいと。

紀昌はすぐに西に向つて旅立つ。その人の前に出ては我々の技のごとき見戯にひとしいと言つた師の言葉が、彼の自尊心にこたえた。もしそれが本当だとすれば、天下第一を目指す彼の望も、まだまだ前途程遠い訳である。己が業が見戯に類するかどうか、ともかくにも早くその人に会つて腕を比べたいとあせりつつ、彼はひたすらに道を急ぐ。足裏を破り脛を傷つけ、危巖を攀じ棧道を渡つて、一月の後に彼はようやく目指す山顛に辿りつく。

気負い立つ紀昌を迎えたのは、羊のような柔和な目をした、しかし酷くよぼよぼの爺さんである。年齢は百歳をも超えていよう。腰の曲つているせいもあつて、白髯は歩く時も地に曳きずつている。

相手が聾ろうかも知れぬと、大声に遽さだしく紀昌は来意を告げる。己が技の程を見てもらいたいむねを述べると、あせり立った彼は相手の返辞をも待たず、いきなり背に負うた楊幹麻筋ようかんましんの弓を外して手に執とつた。そうして、石碣せきけつの矢をつがえると、折から空の高くを飛び過ぎて行く渡り鳥の群に向つて狙いを定める。弦に応じて、一箭いっせんたちまち五羽わの大鳥が鮮あざやかに碧空へきくうを切つて落ちて来た。

一通り出来るようじゃな、と老人が穏おだやかな微笑ふくを含んで言う。だが、それは所詮射しよせんしやのしや之射しやというもの、好漢ふしやのしやいまだ不射ふしや之射しやを知らぬと見える。

ムツとした紀昌を導いて、老隠者ろういんじやは、そこから二百歩ばかり離れた絶壁ぜつぺきの上まで連れて来る。脚下きやつかは文字通りの屏風びやうぶのごとはなき壁立千仞へきりつせんじん、遙か真下に糸のような細さに見える溪流けいりゆうをちよつ

と覗いただけでたちまち眩暈めまいを感じずるほどの高さである。その断崖だんがいから半ばなか宙に乗出した危石の上につかつかと老人は駈上り、振返ふりかえつて紀昌に言う。どうじゃ。この石の上で先刻の業を今一度見せてくれぬか。今更引込ひっこみもならぬ。老人と入代りに紀昌がその石を履ふんだ時、石は微かすかにグラリと揺ゆらいだ。強しいて気を励ほげまして矢をつがえようとすると、ちようど崖がけの端はしから小石が一つ転がり落ちた。その行方ゆくえを目で追うた時、覚えぬ紀昌は石上に伏ふした。脚あしはワナワナと顫ふるえ、汗あせは流れて踵かかとにまで至った。老人が笑いながら手を差し伸のべて彼を石から下し、自ら代つてこれに乗ると、では射というものをお目にかけてようかな、と言つた。まだ動悸どうきがおさまらず蒼あおざめた顔をしてはいたが、紀昌はすぐに気が付いて言った。しかし、弓はどうなさる？ 弓は？ 老人は素手すてだったのである。弓？ と老人は笑う。弓矢の要いる

中はまだ射之射じゃ。不射之射には、烏漆うるしつの弓も肅慎しゅくしんの矢もいらぬ。

ちようど彼等らの真上、空の極めて高い所を一羽の鳶とびが悠々ゆうゆうと輪えがを画えがいていた。その胡麻粒ごまつぶほどに小さく見える姿をしばらく見上げていた甘蠅がが、やがて、見えざる矢を無形の弓につがえ、満月のごとくに引絞ひつてひょうと放はなてば、見よ、鳶は羽ばたきもせず中空から石のごとくに落ちて来るではないか。

紀昌は慄然りつぜんとした。今にして始めて芸道げんどうの深淵しんえんを覗き得た心地であつた。

九年の間、紀昌はこの老名人の許もとに留とどまつた。その間いかなる修業を積んだものやらそれは誰だれにも判わからぬ。

九年たつて山を降りて来た時、人々は紀昌の顔付かほづの変つたのに驚いた。以前の負けず嫌きらいな精悍せいこんな面魂つらだましいはどこかに影かげをひそ

め、なんの表情も無い、木偶のごとく愚者のごとき容貌に変わっている。久しぶりに旧師の飛衛を訪ねた時、しかし、飛衛はこの顔付を一見すると感嘆かんとんして叫さけんだ。これでこそ初めて天下の名人だ。我儕われらのごとき、足下あしもとにも及ぶものでないと。

邯鄲の都は、天下一の名人となつて戻つて来た紀昌を迎むかえて、やがて眼前に示されるに違いないその妙技への期待に湧返つた。ところが紀昌は一向にその要望に応こたえようとしない。いや、弓さえ絶えて手にとろうとしない。山に入る時に携たずえて行つた楊幹麻筋の弓もどこかへ棄すてて来た様子である。そのわけを訊たずねた一人に答えて、紀昌は懶ものうげに言つた。至し為は為なす無く、至言は言を去り、至射は射ることなしと。なるほどと、至極物分しごくものわかりのいい邯鄲の都人士はすぐに合点がてんした。弓を執らざる弓の名人は彼等の誇ほこりとなつた。紀昌が弓に触ふれなければ触れないほど、

彼の無敵の評判はいよいよ喧伝けんでんされた。

様々な噂うわさが人々の口から口へと伝わる。毎夜二更さんこうを過ぎる頃、

紀昌の家の屋上おくじょうで何者の立てるとも知れぬ弓弦の音がする。名

人の内に宿る射道の神が主人公の睡ねむっている間に体内を脱ぬけ出

し、妖魔ようまを払はらうべく徹宵守護てつしやうしゆごに当たっているのだという。彼の家

の近くに住む一商人はある夜紀昌の家の上空で、雲に乗った紀

昌めづらが珍めづらしくも弓を手にして、古の名人・羿げいと養由基の二人を相

手に腕比べをしているのを確かに見たと言いい出した。その時三

名人の放った矢はそれぞれ夜空に青白い光芒こうぼうを曳ひきつつ参宿さんしゆくと

天狼星てんろうせいとの間に消去しょうきょしたと。紀昌の家に忍しのび入ろうとしたとこ

ろ、堀へいに足を掛かけた途端とたんに一道の殺気が森閑しんかんとした家の中から

奔はしり出てまともに額ひたいを打うったので、覚えず外に顛落てんらくしたと白状

した盗賊とうぞくもある。爾来じらい、邪心じゃしんを抱く者共は彼の住居の十町四方

は避<sup>さ</sup>けて廻<sup>まわ</sup>り道をし、賢<sup>かしこ</sup>い渡り鳥共は彼の家の上空を通らなくなつた。

雲と立<sup>たち</sup>置める名声のただ中に、名人紀昌は次第に老いて行く。既に早く射を離れた彼の心は、ますます枯<sup>こ</sup>淡<sup>たん</sup>虚<sup>きょ</sup>静<sup>せい</sup>の域にはいつて行つたようである。木偶のごとき顔は更に表情を失い、語ることも稀<sup>まれ</sup>となり、ついには呼吸の有無さえ疑われるに至つた。「既に、我と彼との別、是と非との分を知らぬ。眼は耳のごとく、耳は鼻のごとく、鼻は口のごとく思われる。」というのが、老名人晩年の述<sup>じゆつ</sup>懐<sup>かい</sup>である。

甘蠅師の許を辞してから四十年の後、紀昌は静かに、誠に煙<sup>けむり</sup>のごとく静かに世を去つた。その四十年の間、彼は絶えて射を口にする事が無かつた。口にさえしなかつた位だから、弓矢を執つての活動などあろうはずが無い。もちろん、寓<sup>ぐう</sup>話<sup>わ</sup>作者と

してはここで老名人に掉尾ちようびの大活躍だいかつやくをさせて、名人の真に名人たるゆえんを明らかにしたいのは山々ながら、一方、また、何としても古書に記された事実を曲げる訳には行かぬ。実際、老後の彼についてはただ無為にして化したとばかりで、次のような妙な話の外には何一つ伝わっていないのだから。

その話というのは、彼の死ぬ一二年前のことらしい。ある日老いたる紀昌が知人の許に招かれて行ったところ、その家で一つの器具を見た。確かに見憶みおぼえのある道具だが、どうしてもその名前が思出せぬし、その用途ようとも思い当らない。老人はその家の主人に尋ねたたず。それは何と呼ぶ品物で、また何に用いるのかと。主人は、客が冗談じようだんを言っているとのみ思つて、ニヤリととぼけた笑い方をした。老紀昌は真劍しんけんになつて再び尋ねる。それでも相手は曖昧あいまいな笑を浮うかべて、客の心をはかりかねた様子であ

る。三度紀昌が真面目な顔をして同じ問を繰返した時、始めて主人の顔に驚愕の色が現れた。彼は客の眼を凝乎と見詰める。相手が冗談を言っているのでもなく、気が狂っているのでもなく、また自分が聞き違いをしているのでもないことを確かめると、彼はほとんど恐怖に近い狼狽を示して、吃りながら叫んだ。「ああ、夫子が、——古今無双の射の名人たる夫子が、弓を忘れ果てられたとや？ ああ、弓という名も、その使い途も！」

その後当分の間、邯鄲の都では、画家は絵筆を隠し、楽人は瑟の絃を断ち、工匠は規矩を手にするのを恥じたということである。

(昭和十七年十二月)





底本：「ちくま日本文学全集 中島敦」ちくま文庫、筑摩書房

1992（平成 4）年 7 月 20 日第 1 刷発行

底本の親本：「中島敦全集 第一巻」筑摩書房

1987（昭和 62）年 9 月

初出：「文庫」

1942（昭和 17）年 12 月号

入力：大内章

校正：j.utiyama

1998 年 10 月 26 日公開

2004 年 2 月 2 日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫  
(<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られました。入力、校正、制作  
にあたったのは、ボランティアの皆さんです。